

# 滝田 十和男(たきた・とわお)

## 1、プロフィール

歌人。松丘保養園発行の「甲田の裾」、白秋系の「多磨」「形成」に参加。木俣修に師事し中野菊夫、成田小五郎の選歌指導を受ける。歌集『天河』は全国的に注目された。

<生没>

1924(大正 13)年 12 月 21 日 ~ 2016(平成 28)年 8 月 17 日

<代表作>

歌集『天河』

<青森との関わり>

福島県に生れた。昭和 12 年、父とともに青森県東津軽郡新城村(青森市)にある松丘保養園に入所した。

## 2、作家解説

滝田十和男は、大正 13(1924)年福島県に生れた。

父病むが科(とが)あるごとく罵られ川べりに独り笹舟ながす

(歌集『天河』)より

父の病気に対する村人の偏見のために、幼い日は、ひとりさびしく遊び暮らした。  
10 歳の秋に全身、数カ所に斑紋の徴候があらわれ、

更衣室に追はれし吾れの利耳(ききみみ)に母の嗚咽は響ききたれり

そして、自分自身と一家をおそった暗影に幼い魂がおびえる日がつづいた。昭和  
12(1937)年、父とともに青森市の松丘保養園に入所することになり、

とほくゆく癩(なみ)のからだを憚りて出で立ちをさへ夜半をえらべり

と詠い、父は、母と嬰兒にわかれ、父と子は、ふるさととの別れに、笥の冷たく、清らかな水をこころゆくまで飲んだ。入園後、園内の小学校の分校に学ぶ。入園以

来臥せりがちであった父は、幾つもの余病に耐えがたく、血を継ぐ者吾れ1人のみの手を握りながら、14年5月10日この世を去った。

ひきよせて吾が頭(づ)抱へて遣しける臨終(いまは)の言葉おろそかならず

(父逝く)

15年尋常科を卒業、16年の春、孤りのさびしさに堪えがたく、園内から脱走。新城中学校へ通学。そして園内のいろいろな作業に従事した。終戦を転機に、松丘保養園の機関誌「甲田の裾」に短歌を発表。北原白秋系の「多磨」に入会、木俣修に師事し、「多磨」解散後は「形成」に参加して積極的に短歌を発表した。22年に滝田知子と結婚。「契り」「受洗」「知子受洗」などの歌を作る。

伊藤整が、評論「療養者の歌と私小説」(「新潮」)で、「これは、この全歌集の中のもっとも痛烈な作品だと言い得ると思う」と絶賛した歌集『天河』の代表作二首。

幼くて癩病む謂れ問ひつめて母を泣かせし夜の天の川

おろそかに生きて来しとは思はぬに無慚な吾れを置きて年ゆく

### 3、資料紹介

○歌集『天河』

図書

1956(昭和31)年5月5日

180 mm × 110 mm

第1歌集。昭和10年以前、父の病気に対する村人の偏見のために、ひとりさびしく遊び暮らした幼い日の思い出から、自らも父と同じ病に冒されてゆくを知る。成田小五郎が「すぐれた小詩型の上に劇的な半生を見事に描いた」と評したところの世界が詠われている。